東日本大震災により被災した家族の研究
—家族の問題と適切な支援の検討—

山田　幸恵・中谷　敬明
（岩手県立大学社会福祉学部）

<要　旨>

本研究では、被災した家族を取り巻く問題を明らかにするとともに、震災発生直後から時系列に沿った家族支援ニーズを把握し、適切な支援につなげることを目的としたインタビュー調査を行った。また、これまでに被災地に提供された様々な支援への思いと、今後の長い復興の道のりを見据えてどのような支援を必要としているのかについても検討した。

岩手県沿岸の被災地域に居住する親を対象としてインタビュー調査を行った結果、家族関係の変化とそれによる問題は、①被災により家族形態が変化したことによる問題、②父親あるいは母親の勤務形態の変化による問題、③震災直後の子どもあるいは親の心身の変化による問題があげられた。東日本大震災は物心ともに家族に大きな影響を与えた災害であることが示された。今後の生活への希望としては、公園を造ってほしいという語りが多く見られた。また、母親の就労支援や子育ての環境整備等、ハード面だけではなくソフト面での支援の希望が多岐にわたることが示された。

<キーワード>

東日本大震災、家族、支援

【はじめに】

東日本大震災により、岩手、宮城、福島の太平洋岸の市町村は、地域自体が流されてしまうという甚大な被害を受けた。地域が流されたということは、住宅だけではなく役所や学校、医療機関といった公共施設もその多くが流失している。つまり、基本的な生活基盤が根こそぎ失われた状態となった地域が数多く存在する。

このような中で、災害により地域から孤立してしまった家族や、崩壊の危機に瀕している家族の話もうかがわれる。被災地における離婚・別居の問題も徐々に増加してきている。多くの被災者は震災によるトラウマティック・ストレスに加えて、親しい人との死別や馴染んだ地域の喪失による悲嘆の状態にある。さらには、仮設住宅という新たな生活の中での日常的なストレスにも曝されている。これらの複合的なストレスによる反応は家族成員によって表出の仕方が異なり、それゆえに相互理解が進まず、家族内不和を招くこともある（中島，2011）。

岩手県には震災以降、様々な支援が提供された。行政を中心とした公的なものから、NGO団体やNPO団体といったある程度の規模のもの、個人ボランティアまで様々な支援があった。就学している子どもに対しては、教育委員会を中心とした心のケアが行われている。小学校から高校まで一貫して子どもたちの様子を見ていく計画のもと、全公立学校を対象として実施されている。一方で、就学前児童に対しては、岩

手県保健福祉部児童家庭課によるこころのケアが行われたものの、学齢期のように統一かつ継続したこころのケアにはなっていない現状がある。

本研究では、被災した家族を取り巻く問題を明らかにするとともに、震災発生直後から時系列に沿った家族支援ニーズを把握し、適切な支援につなげることを目的としたインタビュー調査を行った。被災地には様々な支援が提供されたが、その評価は不明である。ここでは、これまで行われた様々な支援に関して被災者がどのように感じているのか、また今後の長い復興の道のりを見据えてどのような支援を必要としているのか、についても検討した。

【方法】

1．対象者

岩手県沿岸の被災地域に居住する子どもを持つ親とした。

2．調査方法

岩手県沿岸部の市町村にある社会福祉協議会や子育て支援センター等の子育て支援を行う団体を通して、インタビュー調査への協力のお願いに関する文章を配布した。インタビュー調査への協力に対して了承を得られた親に対して、筆者らが面接調査を行った。面接調査は、各機関の小部屋等を利用した。

3．調査内容

対象者の年齢、家族構成、職業の有無などを聞いた上で、震災時の状況、被災状況、震災以降の家族関係の変化やそれによる問題、受けた支援に関する項目、今後の生活への希望および希望する支援について、今後の災害で子どもを持つ親の支援で必要なこと、の調査項目からなる半構造化面接を実施した。

4．分析方法

インタビュー内容について、KJ 法を踏まえて、定性的に帰納的分析を行った。

5．倫理的配慮

研究の背景と目的、対象者、実施期間、内容、方法、倫理的配慮、結果の報告、研究者の連絡先を書いた説明文書を用意し、対象者に対し面接の冒頭で文書と口頭で説明を行った。研究内容とインタビューの録音について同意を得た上で、同意書にサインをいただき、面接を開始した。なお、倫理的配慮の内容として、研究への参加は自由意思に任されていること、参加を拒否しても不利益はないこと、答えたくない質問には答えなくて構わないこと、途中で回答をやめても構わないこと、プライバシーの保護に関する説明を行った。

本研究は岩手県立大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認されている。

【結果】

1．対象者

インタビュー調査の協力に了承をした対象者は 25 名であった。今回はインタビューの録音に同意を得た 20 名を分析対象とした（平均年齢 33.85 歳, SD=4.16)。対象者はすべて母親であり、調査時点で就業していた者は 7 名、子どもの数は 1 名～6 名で平均 1.75 名(SD=1.25)であった。また、調査時の子どもの年齢は 0 歳～14 歳であり、平均年齢は 3.65 歳(SD=3.16)であった。家屋流出などの被害に遭った者は、8 名、避難所生活をした者は 10 名、仮設住宅への入居があった者は 7 名であった。

2．震災直後（約半年間）に困ったこと

(1) 避難所利用者

①物資面

震災直後は、水、食料、ミルクなどがなく困った、子ども向けの食糧がないのは仕方ないが不安であったという声が多かった。これについては避難所ごとの状況が異なり、食事は震災当日から出たという場所もあった。外部からの物資が入るようになってからは、避難所ごとの物資の偏りや、物資が入っても子どもがいるために取りに行けないという、小さい子どもを抱える親特有の悩みも話された。

（事例）
・一番困ったのはミルクですね。おむつは最悪なくても、ね。
・お百姓の人がいっぱいいて、お米があったし野菜も作っていたし＜中略＞沢水があったからその日の夜にはもう、ご飯が炊けて。
・子どもがいるのでちょっとやっぱりあの…支援物資が来たのでっていう連絡をもらっても、あの、もらいにっていうか並びに行けないんですよね。＜中略＞知り合いがいっぱいいたのでこう、交代で面倒見ながらっていうのもできるかなーとは思ったんですけど、＜中略＞結構お母さんとちょっと離れるだけですぐ泣き出す状態の子とかいて、預かれる状態じゃなかったので。

②環境面

震災直後は、トイレが使えない、寒い、という停電、断水といったライフラインの断絶に関わるものが多かった。しばらくしてからは、避難所の運営責任者は中年の男性が多かったため、なかなか女性特有の困ったことが言えない、ということや、運営する人がどんどん変わるので困ったということがあげられた。また、小さな子どものいる家族は、体育館などではなく教室に避難スペースを設けてもらうなどの優遇措置があったことで助かった反面、それによる居づらさがあったことなどが話された。

（事例）
・やっぱりトイレが一番困りましたかね。すぐ汚れるし、手も洗えないし、トイレットペーパーもちょっと不足しがちだし…。
・小さい子どもがいる家族が優先的に入れる部屋っていうのをあの…避難所の運営者側で用意してくれて、でそこに入ったんですけど。＜中略＞体育館にいるよりは多分凄く優遇されて、その分でもこう…そこを優遇されてんだからいいよねってこう同じ避難所にいても分けられてるから、そっちいいでしょって言われるのもあったんで。

③その他

正しい情報が入ってこなかった、どのような状況なのかわからなかった、など情報面の困り感が語られた。震災後しばらくしてからも、仮設住宅の情報や、物資配布の情報、子育て支援関係の情報などが正しく伝わってこないために困ったということもあった。車があった人は、ガソリン不足でも困ったという訴えがあった。

（事例）
・やっぱり情報がなかったのと、あと車はあったんで、ガソリンは欲しかったですね。
・ちょこちょことは入っていたんですけど、なんでしょう、大まかに伝わるっていうか、本当に細かく、どこがどうなったのか、自分の家がどうなったのかとかそういうのは（わからなかった）

(2) 自宅・親戚宅避難者

①物資面

水や食料、ミルク、おむつなどがなくて困った。避難所には物資が来たが、被災してないため物資をもらいに行けなかったという、複雑な気持ちが語られた。子どもがいるために並んでまでの買い物ができず困ったが、親や親戚などからもらうことで助けられたようである。

（事例）
・何も物がなくて困ったんですけど、でもうちは両親が買ってきてくださっていて…
・２日くらい、おむつなくて、お尻真っ赤にさせちゃって、ですかね。

②環境面

ライフラインの断絶に関わる困り感が多かったが、地域によっては復旧が早かったためとても困ったことはないという人もあった。実家に避難していた人からは実家とはいえ肩身が狭いといったことや、母子のみ避難している場合は家族が離れ離れでいることがあげられた。

（事例）
・あの、旦那のおばさんたちに○○ちゃんは実家は居心地いいだろうけどじいちゃんも帰ってくるんだから、仮設に入ってください、おねがいしますって、私おばさんたちに言われたんですね。
・やっぱいくら、そう、いくら実家って言っても、気を遣うわけで。やっぱ兄の奥さんに気を遣いましたよね。

③その他

正しい情報が入ってこなかったことや、ガソリンの不足のため通勤や買い物に困った、病院が被災者のみの対応のため子どもが受診できなかったことなどがあげられた。震災によって解雇されたということもあったようである。

（事例）
・多分まだ…やっぱり情報が、その、あの無線とかでこう入ったりするんですけども、聞き取りづらかったりとかしたり。
・震災の被災した人以外は診ませんって言われて＜中略＞必死の思いで、それこそ信号もついていない真っ暗闇の、もう忘れないですね。子どもを泣いてるのを抱えながら、わざわざ来たのにダメって言われて。じゃぁ、どこ頼ればいいんだろうってね。

3．震災後（半年後以降～現在）に困ったこと

(1) 仮設住宅について

仮設住宅入居直後はプライベート空間を確保できた喜びがあったが、仮設住宅は狭いことで様々な問題があった。仮設住宅は学校の校庭が多く静かな時間が少ないことや、報道関係者から声をかけられることが多く困った、などの声もあげられた。また、その敷地の問題から車との距離が近く危ないこと、そのため子どもから目を離すことができない、遊ばせることができず困った、などのことが語られた。

（事例）
・仮設だとドア一枚ガラッと開けるとうち、道路との境っていうか、＜中略＞車との距離がちょっと近くて。気持ち的にドア開けられると落ち着かない感じがあったり
・騒音が結構あるので、お昼寝の時間に中学校の応援歌練習が始まったりとか
・その子どもが外に出たがるタイプなんで、外をチョロチョロしてると報道さんがすぐ、＜中略＞子ども連れてるとすぐ報道さん、割と来るんですよね。

(2) その他

公園が仮設住宅になったことで、子どもを遊ばせるスペースがなくなってしまったことなどがあげられた。幼稚園がなくなり、子どもを保育園に預けなくてはならなくなったことがあがった。保育園に預けるには稼働するなどの条件があるが、被災地では求人がなく難しいことや、労働環境がよくないことなども語られた。

（事例）
・公園、近くに公園があったんですけど、そこがもうあの、仮設、今仮設住宅、なんですよね、うん。なんで、公園、遊ばせられる公園が、近くにないですね、
・保育所に入れる時に、あの、やっぱり働けないうちに保育所に入れたんで３か月以内にこう、仕事見つけてくださいよみたいな話をあの市の担当の人からされるんです＜中略＞そもそもその入り易くしてくれてもいいんじゃないかなと。

4．支援について

(1) 支援があって助かったこと

水や食料、ミルクやおむつ、衣服、といった様々な生活必需品にあたる物資について、被災後あまり間をおかずに支援を受けられたこと

や、自衛隊のお風呂といった衣食住のことから、子ども向けのイベントで子どもを楽しませることができた、子どもと遊んでくれる人が来てくれて助かったなどの子育て面のこと、また、整体やマッサージ炊き出しも嬉しかった、などの様々な支援への感謝の気持ちが語られた。

その他、子どもを対象とした遠足バス、夏休みの宿題の工作を作るイベントなど、子どもが普段はできない体験をすることができてよかったといった声があった。

外部からの支援だけではなく、コミュニティの相互の助け合いについても、食料面や、子育て面、情報面などで助かったことがあげられた。

（事例）
・私は一番その、身体揉みほぐしてくれる人が一番良かったですかね。
・もうあとは本当にコミュニティの＜中略＞近所づきあいっていうんですかね、そういうので、どこどこのお店で、なんか…おみ…あの例えば…なんですかね、こう、もの買えますよとかっていうのも。

(2) 支援に関して困ったこと

賞味期限ぎりぎりの食品の配布、物資の量の多さ、食べきれないものを捨てる申し訳なさ、子どもへのお菓子が多かったこと、子どもにも大人と同じ量の物資がきて多すぎて困ったことなどがあげられた。避難所本部を通さない支援物資など、直接来られると負担や、避難所で子どもの昼寝時間などに来る方、宗教関連の方への困り感も語られた。支援に対する感謝の気持ちが強い一方で、困惑する支援もあったようである。また、支援自体に困るということではないが、たくさんの支援があることで振り回されていた感じがあることも語られた。

（事例）
・どんどん（パン・おにぎり）増えていって、で期限切れいっぱい増えるのをどうしようかってみんなして頭を悩ませたり。
・おもちゃお菓子だったりすると、あの、申し訳ないんですけどもありがたいのは最初の何回かだけで、それ以降はちょっともう、おもちゃ増えるしお菓子も山ほどあるし…
・あと、宗教の方。あからさまにっていうのはいないんですけども＜中略＞なんだか小さい紙切れが置いてあるっていうのも…
・色々支援もたくさんいただいてありがたかったんですけど、その支援に振り回されてたようなことが多々あったので。

(3) あればよかったと思うこと

避難所の暖房についてや、子どもを遊ばせてくれる人が来た時に親もついていなければいけなかったので、少し子どもと離れて片付けたい用事もあることから、保育園に預けるような感覚で使えるところがあるとよかった、といった声が多くあった。

（事例）
・（同じ部屋で子どもと遊んであげるから）休んでください休んでくださいって言われても、なんか寝れなくて。寝れないし、休んでも気分的に休んでもいられないので、ちょっとでいいからこう、子ども預かって、あの離してくれる人って誰か来てくれないかなってみんな言ってたんですよね。＜中略＞保育園みたいな感じでこう、面倒見てくれる人欲しいよねって言ってたんですよ

5．震災後の家族関係の変化

(1) 子どもの変化

親から離れない、余震で怖がる、地震で津波警報が出ると、家の外に飛び出してしまうことなどがある、夜泣き、地震ごっこ、など地震を経験したトラウマ反応と捉えられる変化が見られた。また、体調を崩した、精神状態がおかしい、遊び場に行けなくて心身ともに疲れたなど、様々な心身の不調についても語られた。

（事例）
・子どもも精神状態おかしいし、私も休む暇ないし。お姉ちゃんの方がそのストレス溜まってるっぽくてよく泣くようになって、で２番目の子の方が＜中略＞夜泣きが凄くなって、夜今度私が寝れなくなったんです。

・余震が来ると怖がります
・次男の方は最近まで地震が来ると＜中略＞（今住んでいるところは）大丈夫なとこじゃないですか、かなり内陸で。なんですけど、必ず逃げようってこうパニック状態になって、そして、それを収めるためにいつも＜中略＞みんなで車で移動して警報解除になるの待ってたりとか。

(2)母子関係の変化

塗り絵の企画に子どもは行きたがったが、母親としてはもし重い絵を持って帰ってきたらどうしようと思い行かせたくなかった、離れている間に何かあったらどうしようと思うようになった、常に一緒いたい、など、母親側も子どもと離れることの不安を感じていることが数多くあげられた。「母親の私の精神状態が安定していないと、子どもへの接し方にかなり影響があった」といった、母親の精神的な状態が子どもに影響していたことも語られた。

（事例）
・でも、預けている間、もしここで震災が起きたら、娘はどうなるんだろうっていう不安が結構起きてきて、あんまり子どもと離れてはいられないなっていう、そういう風に思いました。

(3) 父子関係の変化

父親の仕事が忙しくなり、子どもと過ごす時間がほとんどなく「子どもが父親の顔を見て泣く」ことが続き、夫が「帰ってきたくない」といったというようなこともあり父子関係への影響もあったようである。

（事例）
・まぁ多分うちの主人は息子に会えないってのが一番辛いんだと思うのですけど、朝6時過ぎに家をでて、帰ってくるのが21時過ぎなので、寝てるので、あの、来て直ぐの時はまだ彼も何も分からない赤ちゃんだったので、父親の顔を忘れてるっていうか、知らない。

(4)夫婦関係の変化

夫の仕事が忙しくなり家にいない日が増えた、あるいは通勤時間が伸びたことや、残業が増えたことにより、夫が家のことに関わることが少なくなったことが多くあげられた。また、妻がいらいらしていることにより、父親から「実家に帰ってくれた方がやりやすい」と言われたりすることもあったなど、夫婦関係にも影響を及ぼしていたことがわかった。

一方で、震災時に夫が落ち着いて対応していた姿を見たことにより、頼れると思うようになったなど夫へのポジティブな意識の変化も認められた。

（事例）
・あの、子育てって、2人でやるというか、こっちが家族なのに、自分が忙しくて実家があるからいいでしょみたいな感じが、ちょっと無責任だなって思いました。
・意外と肝が据わっているかもしれない、こんな時にとおもって。＜中略＞この人で保ったなって思いました。

(5)家族関係の変化

震災で家屋が流出した家族などは、震災により義父母との同居、あるいは義父母と同居していた家が流され仮設住宅では別世帯となるなど、家族構成の変化も多かった。同居となった場合には、生活のリズムの違いによる軋轢や義父母の老いを実感する、義父母の前では夫に相談もできないなど、家族関係の問題がうかがわれた。別世帯となった場合には、それまで義母と分担していた家事を一人で行うことの負担や、別居した義父母への心配などがあげられた。

（事例）
・両親が同居して。で、同居が3ヶ月ぐらいでしたね。＜中略＞生活リズムが違う訳ですもんね。4時起きで19時睡眠。
・姑と分担していた家事をひとりでやるので
・（同居で）嫁姑のバトルは出てきますよね。

6．子育てについて

(1)子育てで困ったこと

時期によっては、被災地では出産ができなかった、母親学級や乳幼児健診、予防注射がなかったなどの、通常であれば当たり前にあるサービスがなかったことがあげられた。母子手帳を流出し、それまでの記録がなく困ったということもあったようである。

最も多くあげられたのが、子どもの遊ぶ場所がないことであった。また、子育てについて相談できるところがなかったり、被災していない自宅に親戚が来ることが増え、子どもの生活リズムが崩れたり、子育てについて非難されたりといったこともあったようである。

(事例)
・遊ぶ場所…うん、ですね、遊ぶ場所がないのが一番ちょっと困りましたかね。
・支援センターも被災後すぐには開かなかったので、それはちょっと、早く開いてくれたら助かるなっていう思いはあった
・1歳児健診ですね。1歳児健診がなくて
・同じ仮設の、に、同じくらいの子がいても、狭いから、じゃあ部屋の中で遊びましょうっていうわけにもいかないので。

(2)子育て支援について

子育て支援センターがあることで、子どもが遊べるだけでなく、ママ友が作りやすい、いろんな詳しい情報をもらえる、子育ての相談ができる、悩みを聞いてもらえる、など、子育て支援施設に対する感謝の言葉が多く見られた。

(事例)
・話せる人が多いほどいろんな情報が入るし
・日中くる場所があるだけでも楽

(3)子育てに対する意識の変化について

明日どうなるかわからないという危機感があること、離れる時間を少なくしたい、といった声が多く見られた。また、将来何があるかわからないから、冷静に考えられる力をもった子に育ってほしいという希望も聞かれた。

(事例)
・地域の人たちとの話が増えた分、自分の子育てについての価値観が少し変わったかな。＜中略＞他の子を見る目も変わってきた。自分の子どもだけじゃなくよその子も可愛いなって思ったり、成長してるなって思いながら眺められるようになった。
・意識っていうか何だろう、もう、何か常に一緒にいたいっていうか、離れる時間を少なくしたいっていうのは思いました。＜中略＞常に一緒にいないと私が不安ですね。

7．今後の希望と希望する支援

安心して子どもが遊べる場所、公園を造ってほしいという声が多かった。地域の公園だけでなく、子どもも大人も楽しめる大規模な公園を希望する声まで様々であった。また、子どもが普段はできない体験をする機会を提供するような、震災支援の継続や、子どもの塾や習い事の場所がほしいという声もあった。

幼稚園や保育園についての希望も多く、保育園の利用をしやすくしてほしい、幼稚園の行事で今まで行っていたところに行けなくなったため、活動できる場所ができるといい、といった意見があった。

震災から 2 年たっても街づくりが見えてきていないため、それに関する支援もあげられた。都会のよいところ、例えば病児保育などを取り入れてほしいといった声、海や自然を生かした街にしたいといった声など、街のハード・ソフト両面に対して、それぞれが様々な思いをもっていた。仮設住宅居住者は、自宅を建てることも今後の大きな希望のようであった。

就労に対する希望も多く、母親が仕事につけるような支援や、将来の子どもの就労を考えた

支援などの希望もあった。一方で母親もほっと一息つける場所や気分転換ができる場所がほしいといった声もあった。

（事例）
・気軽にリフレッシュをする場所がないってのが、一番ストレスかなぁ。
・これからだと、まぁ、住宅とかそういう支援も欲しいですし、あと、働き口とかも欲しいというかあればいいと思いますね。

8．災害で子どもを持つ親の支援に必要なこと

まずは、食料や水、衣類といった物資があげられた。その上で、自宅で避難している人にもちゃんと物資が届くようなシステムの必要性も述べられた。また、親は自分がどうであっても子どもにと思うため、子どもに必要なミルク、おむつ（おしりふきと使用後のおむつを入れる袋とセットだと望ましい）、離乳食、などが第一であるということが話された。情報についても、正確な情報が生活の立て直しに必要であることや、不安が多少解消されるなど、様々に語られた。お風呂の支援も清潔面の意味だけではなく、気分転換の意味でもよい支援であり災害時の支援として必要なものであると思われた。なお、物質的な支援だけではなく、こころのケアについてもその重要性が語られた。

避難所については、世帯特徴にあった配慮が必要との意見があった。また、子どもと遊んでくれるだけではなく保育的支援もあげられた。

子育てについては、子育て全般について相談できる場所が、被災後も機能することの必要性があげられた。

復興に向けての支援という点では、資格取得の支援など、子どもがいても母親が働けるような支援が必要であることが語られた。そして、子育て中の人が孤立しないようなネットワークや、母親同士、母親と地域がつながれるための支援があるといいということもあげられた。

（事例）
・まずは生きていくための支援、生活していくためのものの支援と、その先の生活…安定した生活ができるという安心感。それから子供を育てていく環境…ですかね。
・お母さんとか子どもが、被災した市にいても、ここの施設があれば大丈夫みたいな、安心できる施設があればいいなぁって
・物資の支援も大事ですけどやっぱり心のケアが大事だと思いますね。

【考察】

インタビュー内容を分析した結果を、ここでは以下の5つの観点から考察する。

1．震災後に困ったことと今後の自然災害における支援について

避難所生活の経験如何によって異なるものの、ライフラインの断絶による困難が最も多く語られた。震災直後の数日はまず食料不足があったが、食料の支援は迅速に行われていたものと考えられる。しかし、子どもを持つ親としては、子ども用の食糧がなかったことへの苦労が語られた。緊急時にはまず生命の維持が最優先であるが、今回の大震災のような避難が長期化する災害時には、乳幼児用、子ども用、高齢者用、妊婦用といった食糧支援も必要だと思われる。また、避難所や地域によっての偏りがあったことは否めない。現地は混乱状態であることから、震災直後は外部支援者による現状調査に基づいた配布が求められるのではなかろうか。

その後は、トイレやお風呂といった清潔面での困り感が語られた。感染症などの二次被害を防ぐためにも、特にトイレについては各自治体に平時からの備えが必要であると考える。

また、物資の配布や販売、医療情報、余震や

津波の再来に関する「正しい情報がなく困った」という訴えが避難所生活者はもちろん、自宅等避難者からも多く聞かれた。これは東日本大震災の被災地域の地理的な問題もあると考えられる。津波の被害があった地域が混乱し、正しい情報が得られなかったことは当然であるが、津波の被害を受けなかった被災市町村の内陸部が情報や支援から孤立したことは、報道等でも取り上げられていない。行政機能が壊滅状態だったため市町村には発信機能がなく、有線も無線の情報受信も不能であった。支援者やマスコミは被害が甚大だった被災地域に目を向けやすいため、周辺地域への支援は自ずと必要性の順位が低く見積もられる。しかし、生活基盤の被災状況は沿岸部と同じであり、特に子どもの必要物資は優先されるものであると考える。このような、甚大な被害を受けた地域の周辺が空白となる“被災地における支援の逆ドーナツ化現象”を防ぐ手立ての検討も必要であろう。

また、自宅等避難者は、医療機関に受診を断られただけではなく、乳幼児健診等も受けられず、健診再開の情報も得られなかったという例もあった。避難所の回診や震災による傷病者の医療は不十分ながら機能があり、エコノミー症候群の予防やこころのケアについては考慮されていた。しかしながら、在宅の乳幼児や高齢者の予防活動があまり注目されず後手に回っていた。これもまた、“被災地における支援の逆ドーナツ化現象”の一種といえるであろう。

2．家族関係の変化とそれによる問題

家族関係については、変化があると感じている対象者と変化は特にないと感じている対象者にはっきりと分かれた。家族関係の変化とそれによる問題としては、①被災により家屋が流失し仮設住宅に入居したことで拡大家族から核家族になった、あるいはその逆に核家族から拡大家族になったという家族形態の現実的な変化による問題、②父親あるいは母親の勤務形態の変化による問題、③震災直後の子どもあるいは自身の心身の変化による問題、があげられた。①②の問題に関しては、被災による家屋や勤務先の流出という物理的な被害に起因する問題であり、③に関しては心理的な被害に起因する問題であると考えられる。東日本大震災は、物心ともに大きな影響を与えた災害であったことが示唆された。

3．支援への思い

震災直後には、まず食料や毛布、衣類、風呂といった最低限の生活に必要とされる支援に対する感謝の言葉が多くみられた。これは、災害後の精神保健活動でもいわれる「安心・安眠・安全」の確保がまず必要である（金, 2001）ことを支持するものである。特に乳幼児を抱える母親からは水やおむつといった子ども用品などの支援物資に対する感謝が多かった。被災後しばらくたってからの支援については、個別のニーズを把握したうえでの支援に対して感謝が述べられた。被災後の混乱の中では、まずは最低限の生活のための物資という物理的な支援が重要であり、その後にソフト面での支援が必要とされる。ソフト面の支援については、宗教的な内容で困惑した、生活時間に配慮して訪問をしてほしかったなど、支援の難しさを感じる内容もあった。災害支援の難しさではあるものの、検討の余地はあるだろう。

子育てについては、地域の子育て支援センタ

ーの存在があげられた。しかし、岩手県沿岸地域は公共交通機関での移動が困難であり、利用できない者も多いと推測される。また、子育て支援センターは自発的な利用を主体としており、問題を抱えた家族や親の利用は多くない。地域の保健師との協働関係を築きつつ、そのような家族にどのような支援をどのように提供できるか、ということは今後の課題である。

4．今後の生活への希望と希望する支援

被災地では学校の校庭や公園などを利用した仮設住宅が多く、子どもの遊び場が非常に少ないことが多くの対象者に共通した問題意識となっていた。実際に子どもたちがのびのびと体を動かして遊ぶ場所がほとんどない。仮設住宅は隣接して駐車場や施設内道路があるため非常に危険な状況で、子どもを遊ばせることができない、狭小な仮設住宅は室内で遊ばせるにも制約が多い、という訴えがあった。そのため、ちいさな公園から大規模な公園まで、公園を造ってほしいという語りが多くみられた。

岩手県の沿岸地域では、被災もあり幼稚園が少ない状況の中、保育園は母親の稼働など入園に係るハードルがある。首都圏での待機児童の問題が近年クローズアップされているが、それとは別の問題が被災地にはある。経済的な困窮などもあり働きたいが、現状で働いていないので保育園に預けられず就職活動ができない、働く場が少ない、等の訴えがあった。子育てへの直接的な支援以外でも、親への支援が家庭の安定に資することが多い。子どもを持つ親の就労への支援も必要とされている。

5．災害で子どもを持つ親の支援に必要なこと

被災後の親の精神状態に子どもの精神状態は影響されることが語られたことからも、子どもへの直接的な支援だけではなく、親への支援も重要であると考える。避難所では子どものいる家族に対する配慮はなされていたが、長期化する場合には大きな避難所には保育園を設置するなどの措置も必要であろう。今回の震災では保育園が流出したことにより解雇された保育士もいたと聞く。そのような保育士の雇用を確保することにもつながるのではないか。いずれにしても、平時における情報の把握と連携が、震災時の対応につながることと考えられる。そのための、平時からの準備が重要である。

復興に向けての支援としては、家庭の安定には経済状況の安定も重要であることから、親への就労支援の必要性が語られた。被災地の雇用は大きな問題ではあるが、雇用の安定がひいては子どもの生活の安定につながる可能性もある。多角的な支援が求められる。

【まとめ】

被災地の復興までの道のりは、まだまだ長い。被災地の家族には様々な環境の変化と家族関係の形態の変化だけではなく、家族の関係性の変化があることが明らかになった。被災地の事情を把握した上での、途切れのない支援に対する希望も多く語られた。今後も被災地の親子が安心できる継続した支援が望まれる。

【文献】

厚生労働省　精神・神経疾患研究委託費外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究班　主任研究者　金吉晴　2001
心的トラウマの理解とケア　じほう　東京